

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2006 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学 大学院	文学 研究科	地理学 専攻
指導教員	所属・職名	氏 名	
	観光学部・教授	豊田由貴夫 印	
自然・人文の別	人文	個人・共同の別	個人
研究課題名	民俗芸能のアイデンティティ変容 ーインド南西部の風刺劇 Tamasha を事例としてー		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	文学研究科・地理学専攻 前期課程 2 年次	飯田玲子 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
研究期間	2006 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

インド西部マハーラーシュトラ州の民俗芸能 Tamāśā (タマーシャーと発音) は 16 世紀後期のムガル朝にて始まったとされ、今日でもマハーラーシュトラ州を代表する芸能だと言われる。

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけては、民族運動を喧伝するメディアとして機能していた面もあれば、村々を廻って風刺劇を行い、権力を笑い飛ばす一面も持っていた。しかし、Tamāśā は他のインド芸能 (サンスクリット古典劇や民俗芸能) に比べて研究が圧倒的に少ないのが現状である。

映画や TV などの新たなメディアの登場によってこれらの民俗芸能が現在どのような立場にたたされているのか。そして生活世界はどのように変貌して、それを生きているのか。それらがこの研究の概要である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

{ 民俗芸能 } { 社会変化 } { 「都市」と「田舎」 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究成果の概要について、以下項目別に記載。

・州政府の保護

歴史的な資料は、今回の調査中に現地の大学図書館、また州政府系の資料なども閲覧させて頂いた。そこで、1970年頃までは、マハーラーシュトラ州が Tamāśā を保護していたことなどが明らかになった。1950年代に入ると、インド五カ年計画などの計画内容の民衆への普及や、教育の向上、公衆衛生などのプロパガンダとして政府から助成を得て、そういった演目を織り交ぜてマハーラーシュトラ州の各地を廻っていたとされる。しかし、インターネットやテレビなどの新たなメディアの普及によって最近ではこういった広報活動などに Tamāśā は利用されなくなり、現在では全く州政府からのサポートはない。また、こうした Tamāśā の衰退については滞在中にマハーラーシュトラ州内で発行されている新聞にも記事が掲載されていた。普段、「下品な芸能」「芸能として低級」とされている芸能ではあるが、マハーラーシュトラ州では長い歴史を持つ民俗芸能として未だに認知・認識されているようである。

・メディア、娯楽としての役割

上記でもあげたように、Tamāśā は 30 年前までは広報活動なども行うものであった。しかし、それらのメディアとしての役割も新たにテレビや新聞などの新たなメディアの普及により、その立場を取って変わられ現在ではメディアとしての機能は殆ど備えていない。また、“庶民の娯楽”として捉えた場合も、映画やテレビなどの新たな娯楽メディアが登場してきている。その為、筆者の滞在していた PUNE に存在する Tamāśā 小屋は閉鎖の少し手前という状況になってしまっている。筆者の調査によると、2007年3月現在の PUNE における映画館の入場料は新作映画の場合 120 ルピー (日本円に換算すると約 360 円) 旧作映画の場合 40 ルピー (120 円)、Tamāśā 小屋の入場料 25 ルピー (75 円) である。他の娯楽に比べ敷居が高いというよりは、むしろ低いと考えられる。しかし Tamāśā の入場料より高くとも、映画館で繰り広げられるきらびやかな世界に比べると客足が Tamāśā から遠のいていくことは、ある種必然とも言える。

・「都市」と「田舎」

筆者が主に滞在し調査を行った PUNE は日本の企業も最近多く進出しており、インド国内でも 7 番目に人口の多い都市でもある。また、教育水準が高く大学や教育機関が多いことから、「インドのオックスフォード・ケンブリッジ」と呼ばれている。そういった背景もあってか、PUNE の多くの人々は「Tamāśā は PUNE ではもう人気がない。田舎ならまだ盛んにやっている。」と語る。そして、PUNE にある Tamāśā 小屋についてはその存在を知らない人の方が筆者が話を聞いた人の中では圧倒的に多かった。(特に 30 代以下になると顕著。) マハーラーシュトラ州の民俗芸能として語られながらも、いわゆる「都会」に居住している人々は Tamāśā は古く、そして低級なものとして語り、そして自分たちよりも「田舎」に住んでいる者たちが喜んで観る芸能だという認識が強いように感じられた。PUNE の人々が「田舎」として指し示した、南に 250 キロ離れた Kōlhāpur (コールハーブルと発音) へと向かったが、そこでは確かに Tamāśā が現在でも祭りなどの時に呼ばれて活動していた。

研究成果の概要 つづき

・売春との関連

Tamāsā が低級と見られる理由として、「売春との関連」とは良く聞き取り調査の際に聞かれた言葉である。筆者が女性であるということもあり、滞在中にはそれらの事については多くを語ってもらえなかった。しかし、州政府の保護がなくなり現在では貧しく、厳しい生活を送っており Tamāsā 一座の人々が生活の糧として売春を行っているということだった。しかし、これらの事は繰り返しになるが今回の調査では多くの情報を得ることが出来なかった。

以上が滞在中に聞き取りを行ったり、資料の提供の機会を得て調べた限りである。

・まとめ

今回の調査は主に、Tamāsā 一座にではなくそれらを取り巻く人々（観客として想定される一般の人々）を対象に Tamāsā をどう見て、どう捉えるかについて調査を行った為、現在の Tamāsā についての完全な理解には至っていない。

しかし、Tamāsā に対する人々の認識が現在ではどのようなになっているのかについては多くのデータを得られた。（「田舎」といわれている kōlhāpur の人々の意識については次回の目標にしたいと考えている。）

今後は Tamāsā 一座の人々自身の生活はいかに変容したのか？などについて、長期間生活を共にすることによって理解していきたいと考えている。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

今回の調査によって得られたデータ使用して、以下の発表を行う予定である。

【雑誌論文】

『南アジア』/南アジア学会

『アジア・アフリカ地域研究』/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【シンポジウム】

「京都人類学研究会」などで口頭発表予定。

【学会発表】

来春、「文化人類学会」などで口頭発表予定。